識別番号　P11　2012 年度完了学内共同研究

研究課題　「ケア」の臨床哲学　その理論と実践

研究代表者　寺田俊郎（文学部哲学科）

共同研究者　武田なほみ（神学科）、大橋容一郎（哲学科）、崎川修（哲学科）、早川正祐（哲学研究科）、鈴木守（保健体育研究室）、浅見昇吾（ドイツ語学科）、丹木博一（短期大学部）

Summary　CLINICAL PHILOSOPHY OF CARE--ITS THEORY AND PRACTICE

This research project aimed to search for the way philosophy can contribute to thinking about problems faced at various scenes of care. One of the ways which had been already tried is Clinical Philosophy, which aimed to promote philosophical thinking through dialogues with people at the scenes of problems. In this Clinical Philosophical spirit we held conferences and workshops with experts from different fields of care, philosophical cafés with those who are concerned with the problems of care, and set up a webpage to build up a network of inquiry into care.

１．研究の目的及び背景

本研究は、現代の人間社会を支える教育、医療・看護、社会福祉といった「ケア」の現場における諸問題に対して、哲学的知の立場から寄与する可能性を、理論的基盤および実践的方法の両面から考察、探求することを目的として開始された。そのため、三つの研究分野（あ）哲学的・行為論的基礎研究、（い）人間学的・社会倫理的研究、（う）臨床哲学的研究を定め、それぞれの現場における「ケアの知」を共有しつつ活性化させるネットワークの構築を提案、実現することが目指された。

その背景として次のことがある。（１）哲学が現代社会のさまざまな課題に応答し貢献する必要に迫られていること。その社会的課題の一つがケアの現場で生じるさまざまな困難である。（２）本学でも、従来の社会福祉学科や臨床心理学科に加えて、グリーフケア研究所の移管、看護学科の設置、上智福岡中学・高等学校の発足など、ケアの現場に直接かかわる教育研究が拡充されていること。本研究に参加した教員の多くがこれらの活動にすでに加わっている。

しかし、多くの課題を抱えるケアの各現場には、それぞれに固有の文化、方法論、認識があり、学術研究としての哲学を単純に「応用」することによっては、現場のニーズを満たせない。また、各現場に特化した学術専門的分野は、その専門性のゆえに問題の人間的、社会的文脈を十分に見渡すことが難しくなっている。こうした状況で必要なのは、現場に固有の問題に直接触れながら、個別の理論的知・実践知を再編成し、知のネットワークを創り出していくダイナミックな作業であり、さらにその知を現場へと還流させていく活動である。そのような哲学の営みの一つとして臨床哲学が挙げられる。また、上智大学においては「人間学」の名称で哲学的知を基盤とした人間教育の臨床的伝統が存在してきた。

２．研究の方法・内容

（１）定例研究会を 2011 年度、2012 年度合わせて 8 回開催した。2011 年度は「いのちをめぐるケア」、2012 年度は「くらしを支えるケア」を定例研究会の共通課題とした。定例

研究会では、研究メンバーとゲスト・スピーカーがそれぞれの視点から報告と問題提起を行い、討論・対話を通じて、ケアの現場の問題を共有し、哲学的・行為論的、人間学的・社会倫理的に考察することに努めた。
（２）公開ワークショップを各年度末に開催した。目的は定例研究会と同じであるが、学外からゲストを招いて、定例研究会では扱いにくい問題に焦点を当てるとともに、参加者も交えた討論・対話を充実させることに努めた。
（３）哲学カフェを 2011 年度、2012 年度合わせて 5 回開催した。これは哲学やケアの専門家であるかないかを問わず、広くケアに関心をもつ人びとと対話を通じて考えることによって、ケアをめぐる考察を深めるとともに、臨床哲学の方法の一つとしての哲学的対話の手法を練成することを目的とするものであった。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の経験を受けて、2 回を「震災とケア」を考えることに当てた。
（４）ネットワークの構築の拠点として、本研究のウェッブ・ページを開設、運用した（http://pweb.sophia.ac.jp/tterada/care/index.html）。これは、研究の趣旨や開催行事の案内・報告を発信するだけでなく、ケアにかかわる人びと、学生、一般市民との双方向の意見交換の場をつくり、ネットワーク構築する実験としての意味をもつ。哲学の専門家とケアの現場にかかわる専門家のエッセイ（試論）を四点掲載している。定例研究会、公開ワークショップ、哲学カフェのテーマ、提題者などの情報もすべてここに掲載してある。
（５）臨床哲学的研究の特徴の一つとして、本研究の代表者・共同研究者は、全学共通科目「ケアの倫理学」やコミュニティ・カレッジ講座「ケアの臨床哲学」などでも講師を務め、ケアの知の共有・活性化に努めた。

３．研究の成果
（１）ケアという概念の意味内容を哲学的・人間学的に吟味することによって、ケアは人間存在の基底を成し、人を人であらしめ、われわれの日常を絶えず支え、〈あなた〉と〈わたし〉の関係のなかで成立するはたらきであり、専門的ケアに限定されないことが明らかになった（ケアの基底性、日常性、相互性、二人称性）。
（２）これらの哲学的・人間学的知見が、ケアの現場にかかわる人びとにも共有され、その人びとをつないでケアをめぐる新たな知を紡いでいくことができることが確かめられた。この知見をもとに、ケアの現場にかかわる人びとと対話する場を恒常的に開き、対話を重ねることを今後の課題としたい。その試みは、すでに本研究の共同研究員数名によって、看護の分野で開始されている。
（３）ケアの現場にかかわる人びとがケアをめぐる考察を共有し深めるための方法として哲学的対話は有用であることを、５回の哲学カフェを通じてある程度確かめることができた。その点でたいへん参考になったのは、定例研究会および哲学カフェで主題になった「当事者研究」という方法である。その方法を整備することを今後の課題としたい。
（４）ケアをめぐる哲学的・人間学的考察をいわばプラットフォームとして、医療・看護、社会福祉、教育、宗教などの諸分野をつなぎ学際的な探求と支援のネットワークを形成する可能性が明らかになった。その構築を今後の課題としたい。